

【第43回城戸賞 佳作】

死にぞこない男の夏休み

岡田 鉄兵

【あらすじ】

雑木林で首吊り自殺に失敗した男がいる。
小野田祐介32歳、ホームセンターの副店長。
同棲していた彼女に逃げられ、ヤケを起こしたのだ。仕事を休み、ひきこもり生活が始まった。

ある日、しつこく玄関チャイムが鳴る。隣に住んでいる中学二年生の幸子だった。家に入れなくなったのでお金を貸してほしいと言う。

それから二人の奇妙な共同生活が始まった。

行方不明の幸子の家族と一緒に探すのが、足取りはつかめない。手がかりがなくなり落胆する小野田に、幸子は出ていった元彼女を探そうと言い出す。

必死に止めるが結局探すことになる。

だが、こちらも見つからない。それほどか小野田の知らない彼女の過去が次々と明らかになっていく。

そんな折、見知らぬ男性が訪ねてくる。彼の妻も姿を消していた。小野田の元彼女と駆け落ちしたと言う。

半信半疑で二人の行方を追う小野田と幸子。結果、男性の妻さんは見つかった。しかし小野田の彼女は、どこにもいなかった。

家へ帰ると、郵便物が届いていた。それを見て、小野田はようやく諦める決心がついた。

一方、幸子は警察に補導されていた。連れて行かれた警察署で母親と再会する。事情を聞いた幸子は自分を捨てた家族を許すことを決めた。

小野田と幸子は、再び別々の道を歩み出すのだった。

【登場人物】

小野田祐介 (34) ホームセンター勤務
岸野 綾 (30) 小野田の元彼女

北島 幸子 (14) 中学二年
北島 茂 (48) 幸子の父
北島みさ江 (43) 幸子の母
北島 亜美 (20) 幸子の姉

中井 博人 (31) ホームセンター勤務

東山慎太郎 (32) 市役所勤務
東山サリナ (29) 画廊勤務・慎太郎の妻

大谷 修一 (55) なにわ運輸会社 課長
橋本 佳代 (44) 学習塾経営
岸野 太 (69) 古書店経営

その他

○ 小野田のアパート・裏

七月下旬の昼下がり。

空は鉛色の雲に覆われ、遠くで稲光が走っている。

夕立がやって来そうだ。

築30年は経つ古ぼけた二階建てアパート。

そのベランダの向かいに雑木林がある。

そこから物音が聞こえる。

○ 雑木林

ポツポツと雨が降り出した。

薄暗い中、小野田祐介(34)が首吊り自殺の準備をしている。

異様に開かれた目が怖い。

木に縄を結び、ゴムのサンダルを揃えて脱ぎ、アルミの脚立を登っていく。

縄をつかみ、首を入れようとする。

その瞬間、バランスを崩して脚立が倒れ、地面に落ちてしまう。

尻餅をついたところに大型犬の糞があり、小野田のズボンにべっとり付いている。

情けなくて惨めだが、なぜだか笑いがこみ上げて来る。

○ 小野田のアパート・表

雨と雷が強くなっている。

上の服は泥だらけ、下はパンツ一枚で歩いて来る小野田。

階段を上り、自分の部屋に入っていく。

少しすると隣の部屋から、北島幸子(14)が笑いを堪えながら出て来る。

幸子は背が高く、大人っぽい。

階段を下り、傘をさして自転車で去る。

さらに激しくなる雷雨。

稲光で一瞬周りが明るくなった。

○ タイトル 『死にぞこない男の夏休み』

○ 小野田の部屋・居間

正午過ぎ、すでに30度を超えている。

台所と居間が続きになっていて、窓際では扇風機が回っている。

小野田と同僚の中井博人(31)が座卓を挟んで座っている。

小野田は無精ひげで寝ぐせヘア。

中井はホームセンターの制服を着て、胸に名札を付けている。

机の上にはコンビニ弁当二つと退職届。

中井はガツガツ食べ、小野田はまったく箸をつけていない。

中井「箸で退職届を示し）受け取れません。

ホームセンター『コヨネ』北大阪店の店長

と副店長になる夢はどうなったんスか？」

小野田「新しい店長に渡しといて」

中井「だからイヤですって。直接、先輩から

お願いします。……なんて書いたんです？」

小野田「一身上の都合により」

中井「でた、ド定番」

小野田『辞めたいねん』て書いたら良かったんか？」

中井「小学生スか」

小野田「……何しに来てん？」

中井「冷たッ。同じ大学で、バイトから正社

員になった仲間じゃないっスか」

小野田「僕はもう辞めたんや」

中井「有給にしときましたから」

小野田「余計な事を」

と寝転ぶ。

中井「差し入れだから喰って下さいよ。パー

トのケチなババア連中がカネ出すなんて奇

跡。もしかして何人か抱いたんスか？」

にらむ小野田。

中井「(無視して) みんな孤独死じゃないか

って。先輩、一週間も無断欠勤してるんで」

小野田「……」

中井「俺、言ったんスよ。同棲してる彼女が

いるから死んでないって。で、来たらビッ

クリ。フラれてたとは」

小野田「おいッ」

中井「今日は地雷ばつか踏んでますね」

小野田「いつもや」

中井「どうして逃げられたんですか？」

小野田『逃げられた』「ちゃう。『出てった』や」

中井「どっちでもいいです。大事な理由は理由」
小野田「分かってたら苦労せん」

中井「ですよねえ。でもオンナにフラれたくらいで、仕事休むなんて情けないっすよ」

小野田「……」

中井「会社の連中は店長になれなかったから、スネてると思ってます。でね、新しく来た店長をパート軍団は早速イジメてます。あれじゃ、一か月持ちませんね」

小野田「(興味なく)ふーん」

中井「本社からジジイ飛ばして来るから、こんな事になるんすよ」

小野田「お前は、もう気に入られたやろ？」

中井「俺は死ぬまで小野田派ですよ。今は偵察のためにすり寄った真似してますが」

小野田「いつまでここで仕事サボる気や？」

中井「先輩に言われたくないです。尻ぬぐいしてるのこっちすよ。喰ったら帰ります」

小野田「……」

中井「やっぱ帰りたくねえなー。外出たら猛暑だし、店内はめっちゃ寒いし。カラダがおかしくなる」

小野田「ホームセンターあるあるやな」

二人が黙ると、隣の部屋から洗濯機の回る音が聞こえてくる。

小野田「丸聞こえやろ？」

中井「(周りを見渡し)でもダイニングもキッチンも広いし、奥にも部屋あるんですよ。この辺りで1LDK、七万なら格安っすよ」

小野田「1LDKというより、寝室と居間と台所って感じや。建物もボロいし」

中井「じゃ、そろそろ行きますね。弁当、食べないなら持って帰りましょうか？」

小野田「喰うかもしれんから、置いといて」
中井「また近々来ますんで」

首を左右に振る小野田。

中井「かわいくねえ、先輩」

と帰っていく。

起き上がる小野田、トンカツ弁当を手にするがカツだけ無くなっている。

小野田「あいつ、やりやがった」

○ 英語塾・教室

授業を真剣に聞く生徒が少ない中、必死にノートをとっている幸子。

×

×

×

休憩時間。

持って来たお弁当を食べる生徒たち。

幸子は次の授業の予習をしている。

しかしお腹がグーと鳴る。

○ 小野田のアパート・表(夕)

自転車を立ち漕ぎして帰ってくる幸子。階段を駆け上がり、部屋に入っていく。

○ 幸子の部屋・居間(夕)

電灯をつける幸子、誰もいない。

一直線に冷蔵庫に向かい、開ける。

調味料しか入ってない。

幸子「ヤバイ」

と財布の中身を確認する。

百円以下の小銭だけ。

幸子「マジ、ヤバイ」

部屋中の引き出しをひっくり返し、おカネを探すが一円も出てこない。

幸子「ガチでヤバイやん」

スマホを出して『パパ』にかける、繋がらない。

『オカン』『オネエ』にもかける、繋がらなかった。

幸子「……終わった」

手を伸ばして、もう一度冷蔵庫を開ける。

幸子、マヨネーズを取る。

そして直接チューと吸う、何度も吸う。

無くなるとゴミ箱に投げ捨てる。

幸子「あー」

と寝転び、大きなため息をつく。

隣の部屋からバラエティ番組の音と小野田の笑い声が聞こえてくる。

幸子「……あの人、元気そうやん」

○ 小野田の部屋・居間

朝。床に枕だけ置き、眠っている小野田。顔面に日光を浴び、寝汗をじっとりかいている。

ドアホンが鳴る、小野田は起きない。二度三度と鳴るが微動だにしない。

○ 同・表

幸子が立っている。

反応がないので行こうとすると、ドアが開いて眠そうな小野田が顔を出す。

小野田「だれ？」

幸子「隣の者です」

小野田「あー。……で？」

幸子「いきなり失礼なんですけど、おカネを貸して貰えませんか？」

小野田「え？」

幸子「事情があつて。千円がいいので」

話してる途中にドアがボタンと閉まる。

幸子「ケチなおっさんやで」

と部屋に戻ろうとする。

また小野田が顔を出す。

小野田「(万札を差し出し) ハイ」

幸子「こんなにいららないんですけど」

小野田「ん！」

と目の前に差し出す。

幸子「(受け取り) 絶対にお返ししますので」

話の途中でまたドアを閉める小野田。

幸子「(小さくガッツポーズ) よっしゃ」

○ ハンバーガーショップ・表

ごきげんな幸子が自転車でやって来る。自転車を止め、急いで店に入る。

○ 幸子の部屋・表

ドアに張り紙がされている。

『家賃滞納 連絡が取れないためカギを交換しました。入室禁止 家主』

それを読んで呆然と立ち尽くす幸子、手にはハンバーガーの袋を持っている。

カギを刺そうとするが、穴に入らない。

幸子「……ホンマに終わった」

○ 公園

子供たちが遊ぶ中、ベンチでハンバーガー片手にスマホを触っている幸子。

幸子「あいつら何やってるねん」

空がどんより曇ってきて、ポツポツと雨が降り出した。

幸子「もうサイアク」

と慌てて立ち去る。

○ 小野田の部屋・居間

外は雨が強くなっている。

小野田、彼女の荷物を処分している。

迷わずどんどんゴミ袋に入れていく。

ドアホンが鳴る。

無視するが、何度も鳴る。

○ 同・表

ドアが開き、小野田が顔を出す。

びしょ濡れの幸子が立っていた。

幸子「先ほどは助かりました。本当にありがとうございました。……」

小野田「またおカネ？」

幸子「(首を横に振り) 家に入れななんです」

小野田「なんで？」

幸子「アレで」

と自分の部屋を指さす。

小野田、確認しに行く。

すぐに戻ってくる。

小野田「とりあえず、あがり」

○ 同・居間

タオルで濡れた髪や服を拭いている幸子。

小野田はそれを見ている。

幸子「(妙に明るく) 助かったー。雨やから、どこも行かれへんもんなあ」

小野田「お母さんに連絡した？」

幸子「繋がりません」

小野田「お父さんは？」

幸子「パパも」

小野田「兄弟とか親類とか」

幸子「オネエは基本シカトやし、親戚には会った事もない」

小野田「……」

幸子「あとで、お風呂借りていい？」

小野田「パンツは？」

幸子「はあ？」

小野田「着替え」

幸子「なんでパンツだけ聞くん？」

小野田「パンツ以外は僕の貸せるから」

幸子「ああ。とりあえず、家に取りに行くわ」

小野田「カギ交換されて無理やろ」

ニヤリと笑う幸子。

○ 同・ベランダ

雨は止んでいる。

幸子が自分の部屋のベランダに飛び移ろうとしている。

それを心配そうに見ている小野田。

小野田「気をつけろよ」

幸子「大丈夫、大丈夫」

と簡単に移動する。

干してある洗濯物をゴミ袋に次々入れる。

幸子「いくで」

とゴミ袋を投げる。

見事キャッチする小野田。

幸子「中に下着あるから見んといてや」

小野田「(小声で) 小便臭いの興味ない」

幸子「なんか言うた？」

小野田「別に」

幸子、小野田のベランダにサッと戻る。

小野田「このアパートは泥棒し放題やな」

○ 同・居間（夜）

小野田と幸子がカップ麺を食べている。

幸子「二、三日泊まって、ホンマにええの？」

小野田「どこも行くトコないなら仕方ない」

幸子「あざーす」

小野田「大変やな。家族全員が行方不明とは」

幸子「ヘーキヘーキ、いない方が逆に楽。住

むところとカネが無いのはキツイけど」

二人、無言になりズルズルする。

幸子「（周りを見て）彼女は？」

小野田「ああ……ちよつと出掛けてる」

幸子「いつ帰って来るん？」

小野田「明日、いや明後日ぐらい」

幸子「この頃、見かけへんけど」

小野田「そんなに会ってた？」

幸子「会うというか音」

小野田「音？」

幸子「隣やから聞こえるねん。髪乾かすドラ

イヤーとか、そんなんに分かる。ホンマは

別れた？」

小野田「ちよつと用事だな」

幸子「バレてるで」

小野田「……うん、別れた」

幸子「やっぱり。理由は？」

小野田「どんだん聞くんやん」

幸子「性格の不一致？ 価値観の違い？ そ

れとも」

小野田「（さへぎり）分からん。一週間前に

突然おらんようになった」

幸子「それ、逃げられたんやで」

小野田「プライベートに土足で入ってくるわ」

幸子「男やろな。オカンもそうやったし」

小野田「北島さんは、プライベートにスパイ

ク履いて荒らし回るタイプやね」

幸子「ごめんごめん。ウチ、いつもいらんこ

と言うてまうねん」

小野田「ほいな」

幸子「ケーサツには連絡した？」

小野田「するかいな、出ていっただけやのに」

幸子「じゃあ、向こうの家族には」

小野田「(ささげり) この話はもう終わり！」
幸子「あと一っただけ聞いていい？」

小野田「アカン。あんたには」

幸子「関係ない、ですよね？」

小野田「(うなずき) 北島さん、名前は？」

幸子「(恥ずかしそうに) ……幸子」

小野田「幸せな子って書くの？」

幸子「そう、ウケるやろ。家族に捨てられた子供やのに」

小野田「確かに皮肉や」

二人、スープを飲みほす。

幸子「あー、サイコーの味」

小野田「ただのインスタントやん」

幸子「誰かと食べたら二割増し、誰かが作ってくれたら三割増しやで。知らんけど」

小野田「知らんのかい。(カップ麺を片付けながら) 寝るのは奥の寝室を使つてや。ゴミ袋の山があるけどな」

幸子「おっちゃんは？」

小野田「おっちゃんて」

幸子「30才超えたら、そうやで」

小野田「そうなん？」

幸子「知らんけど」

小野田『知らんけど』って口癖か」

幸子「みたい」

小野田「僕はいつも通りここで寝る」

○ 同・寝室(夜)

風呂上がりの幸子が入って来る。

安アパートに似つかわしくない天蓋付きのダブルベッドが真ん中にある。

家具もアールデコ調で高級そうだ。

床にはゴミの入ったビニール袋がたくさん置いてある。

目をキラキラさせて室内を見回す幸子。

幸子「彼女、予想通り趣味ええわ」

とベッドにダイブする。

布団のフワフワを確かめ、満面の笑み。

隣にあるタンスの引き出しを開ける。

写真が出てくる。

小野田の元彼女・岸野綾(30)が写っている。

目は切れ長で鼻もすらりと高く、美人だ。

幸子「(じっと見て) エロいわ」

○ 住宅街

小野田と幸子が歩いている。

小野田「ゴミ出し助かった。一人やと何往復もしなアカンかったわ」

幸子「居候やから当たり前やで」

小野田「(指さし) この店。来た事ある？」

幸子「ずっと気になってた。変な名前やから」

古い喫茶店に到着する二人。

看板に『ブスの店』の文字。

○ ブスの店・店内

庶民的な店。

小野田と幸子が奥の席に座っている。

そこにママがモーニングを持って来る。

ブスのママ「はい、お待たせ。(小野田の耳元で) いつもの子は？」

小野田「逃げられた」

ブスのママ「(幸子を見て) あんたらの関係とか野暮な事は聞かへんから、ごゆっくりと去って行く。

小野田「正確にはどのくらい一人暮らし？」

幸子「オカンに最後会ったのが……二か月半前かな」

小野田「二か月半!？」

大声に客の視線が集まる。

幸子「声がデカイ」

小野田「一週間ぐらいと思ってたから。それに高校生やと騙されてたわ」

幸子「おっちゃん勘違いを、ウチが嘘ついたらみたいと言わんとって」

小野田「(顔を見つめて) 老けてるぞ」

幸子「大人っぽい」

小野田「でも、そんなに家族が帰って来てないなら二、三日泊めてっておかしくない？」

その間に連絡があるとは思えんわ」

幸子「それは……」

小野田「待ってもアカン。こっちから探そう」と立ち上がる。

幸子「どうやって?」

小野田「(座って)それを今から考えるんや」

幸子「おっちゃんって、ホームセンターの副店長やろ?」

小野田「なんで知ってるねん」

幸子「女子の情報網をなめたらアカンで。ていうか、今日は休みなん?」

小野田「北島さんと一緒」

幸子「無職?」

小野田「アホ、有給」

幸子「ユウキュー?」

小野田「大人の夏休みや」

○ 駐車場

砂利が敷かれた小さな駐車場。

小野田と幸子が軽自動車に乗り込み、去って行く。

○ 走る小野田の車・車内

運転する小野田、助手席の幸子は落ち着きなくキョロキョロしている。

幸子「これって新車?」

小野田「買って半年」

幸子「ここにあの人が座ってたんや」

小野田「……」

幸子、振り返ると『ベビー イン カー』のステッカーが貼つてあるのに気づく。

幸子「赤ちゃん、おらんやん」

小野田「ああいうの見たら、道を譲ってくれるやろ」

幸子「それ彼女が言うた? 逃げた元カノな」

小野田「そうやけど、言い直す必要あるか」

幸子「ごめんごめん」

道が渋滞してきた。

小野田「お父さんの会社での二人の設定やけど、北島さんはそのまま娘で。僕はいとこのお兄ちゃんていくわ」

幸子「それは無理ある。ウチより20才も年上やから、おじさんちゃう？」

小野田「じゃあ、それで我慢しとく」

幸子「あとウチを北島さんて言うのもへん」

小野田「なんて呼んだらええ？」

幸子「(照れて) 幸子とかさっちゃんとか」

小野田「分かった、姫って呼ぶわ」

幸子「絶対、止めて！」

小野田「おー怖っ、姫に怒られてもうた」

幸子「キモいジジイやわ」

小野田「分かった分かった。無難にさっちゃんにする」

高速道路に入る車。

小野田「お父さんから連絡が最後にあつたのいつ？」

幸子「三か月前」

小野田「長距離トラックの運ちゃんて、月一、

二回しか家に帰らんって知らんかったわ」

幸子「LINEは毎日してたで」

小野田「急に来なくなるのはおかしいな。他の家族はどんな感じ？」

幸子「オカンは飲む打つ買う」

小野田「女やから買うはないやろ？」

幸子「ホストとか、ゲス不倫とか」

小野田「……」

幸子「オネエはキャバクラで働いてるから、アホみたいに遊び回ってる」

小野田「水商売も立派な仕事やで」

幸子「て言うてるけど実際は風俗してるねん。

それも違法な店で」

小野田「……そら、アカンわ」

幸子「ろくでもない男と付き合っつて、ろくでもない女になつたんや」

小野田「お姉ちゃんと会つたのは？」

幸子「覚えてない。いつ帰るか分からんヒト」

小野田「あの狭いアパートに四人は無理と思

つてたけど、全員が揃う事はなかつてんな」

幸子「一回もない。三人も滅多になかつた」

静かになる車内。

小野田「一番マトモなのがお父さんか？」

幸子「そうやってんけど……今は分からん」
小野田「過去形か」

幸子「おもしろいのが三人とも、誰かがウチの
面倒を見てると思ってるトコ」

小野田「……」

幸子「クズ家族をウチは絶対に許さへん」

小野田「そんな家庭でも、さっちゃんはちや
んとした子に育ったやん」

幸子「みんながだらしなから、こんなしつ
かりした女になるしかなかったん」

小野田「……昼飯でも喰おか」

×

×

×

停めた車で、テイクアウトしたハンバー

ガーを頬張る小野田と幸子。

幸子「昨日もこれ食べた」

小野田「言うてくれたら別の店にしたのに」

幸子「ウチ、お腹一杯になったら何でもいい
タイプやねん」

小野田「気になっててんけど、おカネは大丈
夫やったんか。ずっと一人で」

幸子「貯金してた」

小野田「中二でそんなにあるか？」

幸子「家族の財布から、時々抜いててん」

小野田「なんちゅうやっちゃ」

幸子「こんな日が来るような気がしてたから」

小野田「一人ぼっちになる？」

幸子「うん、誰もいなくなる事がよくあった」

小野田「……」

幸子「だけど不幸やと思ってる。下を見れ
ばヤバイ家あるし。虐待も無かったし」

小野田「さっちゃんのケースも十分、虐待や
と思うけど」

幸子「ウチは精神的なんは耐えられる。暴力と
かは絶対無理」

小野田「そうやけど……」

無言になり、黙々とポテトを食べる二人。

幸子「家族探すのにかかったおカネはキッチン
と返すから」

小野田「いらん」

幸子「こつちが払いたいねん」

小野田「いらんって」
幸子「だって」

小野田「(やんせむり) しついで」
幸子「……」

○ なにわ運輸会社・表

大型トラックの出入りが激しい。
そこに小野田の軽自動車が入って行く。

○ 同・オフィス

静かな社内で事務作業をする社員たち。
小野田と幸子は隅の応接ソファに大人しく腰掛けている。

そこにやって来る課長の大谷修一(55)。
二人は頭を下げる。

大谷「ごめんね、お待たせして。娘さんとご親戚の方ね」

小野田・幸子「はい」

大谷「私たちも連絡が取れなくて困ってて」

小野田「三か月前からですか？」

大谷「はい。ここを出てから、戻って来ません。トラックは北島さんのだけど、積んでる商品は会社のだからね」

小野田「警察に届けは出しました？」

大谷「社長は窃盗で届けろと言うんですが、北島さんが泥棒なんてするはずないって、みんなで止めたんですよ」

小野田「すみません」

大谷「奥さんにも電話が繋がらないんですが」
幸子「すみません」

大谷「あなたたちに謝られても」

小野田・幸子「……」

大谷「お二人も手掛かりないんですよ。こりゃ、弱ったなあ」
黙り込む三人。

○ 走る小野田の車・車内

運転する小野田、助手席に座る幸子。
幸子「だから、親戚に会った事ないって」
小野田「一度も？」

幸子「パパって、オトンとちゃうねんで」

小野田「パパとオトンは一緒やろ」

幸子「オトンは死んでん」

小野田「なるほど、義理のか」

幸子「うん、ウチが小五の時に再婚した」

小野田「パパの友達や知り合いは？」

幸子「分らん」

小野田「手掛かりは途切れたっぼいな」

幸子「ぼいじゃなく、完全に途切れた」

小野田「……オカンとオネエの居そうな場所
は分かる？」

幸子「二人とも、ろくでもない男の家」

小野田「誰かは知ってるん？」

幸子「全っ然」

黙って運転する小野田。

幸子「どこ向かってるの？」

小野田「ろくでもない男の家」

幸子「え、知ってるん？」

小野田「僕の家や」

幸子「ああ」

○ 小野田の部屋・居間（夕）

夕陽が差し込む部屋、寝そべって天井を
見つめている小野田と幸子。

扇風機が首を振り、テレビでは高校野球
が流れ、玄関には靴が二つ並んである。

幸子「……ウチ、ここにおつてええの？」

小野田「仕方ないやろ」

幸子「ありがとう……おっちゃんの元カノと
ベランダで洗濯物干す時によく喋ってた」

小野田「女子の情報網で、それやったんか」

幸子「服のセンスとかもええよな」

小野田「よう分からんけど、たぶん」

幸子「なんで、おっちゃんと付き合ったんや
ろ？」

小野田「センスがええからや」

二人が黙り、少し間がある。

小野田「……日が暮れても暑いなあ」

幸子、小野田に風が行くように扇風機を
移動させる。

そして幸子の部屋の方の壁にもたれて座る。

幸子「……自分の部屋でこうしていると、ここから洗濯機の回る音が聞こえるねん。そしてたら、ウチも回して干す時間を合わせてた」

小野田「そんな事してたん」

幸子「彼女な」

小野田「綾？」

幸子「うん、何か魅力的やった。どこがって聞かれたら難しいねんけど……自然体で」

小野田「自然体過ぎて、逆に不自然なぐらい」

幸子「(ベランダを見て) 実は、出て行った

前の日もベランダで喋ってん」

小野田「なんか言うてた？」

幸子「いつもと一緒に『暑は夏いなあ』って」

小野田「アベコベやん」

幸子「そうそう。ツッコまな、怒られる」

小野田「逃げる直前も平常心か。らしいな」

サツと立ち上がる小野田。

幸子「ん？」

小野田「腹減った」

幸子も立つ。

幸子「ウチ、料理作るわ」

小野田「できるん？」

幸子「任せて、普通の中二とはちやうで」

小野田「じゃあ、僕はビール買ってくる。いるもんある？」

幸子「じゃあ、コーラ」

小野田「カロリーオフの？」

幸子「それ太ってるでって意味？」

小野田「いえいえ。じゃ、行ってきます」

と出ていく。

幸子「よし、やるか」

腕まくりをし、冷蔵庫を開ける幸子。

○ 小野田のアパート・表(夜)

買い物に出発する小野田、少し歩いて振り返る。

自分の部屋だけ明かりが灯り、人の動く影が見える。

小野田、笑顔になる。

○ 小野田の部屋・居間

朝。口を開けてイビキをかき、間抜け面で寝ている小野田。

幸子がその耳元で叫ぶ。

幸子「あー！」

小野田「(飛び起き) な、なんや!？」

幸子「起きて、もう六時半やで」

小野田「六時半? まだ夜やがな」

と寝転ぶ。

幸子「(小野田の耳元で) あー！」

また飛び起きる小野田。

○ 同・ユニットバス

幸子がお風呂を掃除している。

隣にある便器もキレイに洗う。

○ 同・居間

ピンク色の風鈴を窓際に吊る幸子。

幸子「押入れ片付けてたら出てきてん。めっ

ちゃ、かわいいなあ」

とつつく、涼しげな音が鳴る。

幸子、大人びた表情で風鈴を見つめる。

小野田「(見とれて) ……」

幸子「(元に戻り) さあ、どいたどいた」

と掃除機をかけ始める。

小野田はあっちへこっちへ逃げながら、

結局ベランダに出る。

○ 同・ベランダ

セミがうるさく鳴いている。

小野田、向かいの雑木林をマジマジと見

ている。

そこに顔を出す幸子。

幸子「おっちゃんって！」

小野田「おお、ビックリした」

幸子「何回も呼んだで。掃除終わった」

小野田「お疲れ。サテンでも行くか」

幸子「まだやる事ある」

小野田「洗濯？」
幸子「昨日やった」
小野田「布団干し？」
幸子「ううん、綾さんを探しに行く」
小野田「なんで？」
幸子「当たり前やんか！ 事件に巻き込まれてるかもしれないで」
小野田「まさか」
幸子「じゃあ、逃げた理由を直接聞こう」
小野田「朝から直球投げるなや」
幸子「ぐずぐずしてたら危険球投げるで」
小野田「退場になるよ」
幸子「しょうもない事、言いな」

○ 同・居間

綾宛てのハガキや手紙を調べている小野田と幸子。

だがDと明細書ばかりで役に立たない。
幸子「電話で確認したって事？」
小野田「会社と親戚のヒトはな」
幸子「綾さんは家族おらんの？」
小野田「聞いてるけど」
幸子「何それ。とりあえず、会いに行こうや」
小野田「無駄やと思うで」
幸子「どうせ暇やん」
小野田「やかましいわ」
年賀状を見始める二人。
幸子「逃げられた日はどんな感じやった？」
小野田「どんなつて……朝、仕事に出て行ってそのまま帰って来ないだけ」
幸子「別れの言葉も無しに？」
小野田「思い返してみればってのはあるかも」
幸子「なに？」
小野田「家出るのは、あいつの方が早いねん。
(玄関を指さし) そこで靴履いてる時にな」
幸子「うん」
小野田「僕に言うたんか、独り言なんか分かるねんけど」
幸子「うんうん」
小野田『なんか違うなあ』って言いよった」

幸子「おっちゃんがカレシとして違うの？
今の自分が違うの？ いったい、何なん？」
小野田「こっちが知りたいわ」
幸子「本人しか分からんか」

○ 住宅街

炎天下、小野田と幸子が歩く。

幸子「おっちゃんて地元どこ？」

小野田「僕は滋賀」

幸子、ふき出して笑う。

小野田「田舎をバカにするな」

幸子「ちゃうちゃう、大人の男のヒトが『僕』
って言うのがカワイイねん。兄弟はおる？」

小野田「一人っ子。親は両方死んでる」

幸子「そら、かわいそう」

小野田「お母さんが高二の時。お父さんは（
指折り数えて）……もう七年前か。僕は天

涯孤独や。また『僕』て言うてもうたわ」

幸子「まあ、ウチみたいに家族がおってもク

ズ連中ならいらんで」

小野田「クズでもおるだけうらやましい」

幸子「本気で言うてるん？」

小野田「（遠い目をして）お母さんが死んで

お父さんと二人暮らしなつてからは、何か
ギクシヤクしてな」

幸子「それで大阪に出てきたん？」

小野田「ああ、大学進学を口実に。最初は年
に何回か実家に帰ってたけど、だんだん減
つて最後は三年も会ってなかった」

幸子「ふーん」

小野田「元々、仲も良くなかつたけど生きて
てくれたらと今でも思うで」

幸子「『生きててくれたら』か」

小野田「どんだん両親の記憶が無くなつてい
く。悲しいもんやわ」

黙って歩く二人、前方に駅が見えてきた。

○ 走る電車・車内

小野田と幸子しか乗っていない車両。
座席に座っている小野田。

幸子は歩いて広告を見たり、つり革で遊んだりと楽しそうだ。

○ ギャラリー大倉・表

大通り沿いにある店。

店先で中を覗いている小野田と幸子。すると東山サリナ(29)が出てくる。

ショートの髪でタイトスーツを着て、ヒールの高い靴を履いている。

サリナ「興味がありましたら、入ってご覧に」

小野田「(さえぎり) 小野田と申します。そ

ちらで働いてた岸野綾の」

サリナ「ああ、彼氏。もう落ち着いた？」

小野田「はい。この間は突然のお電話、すみませんでした」

サリナ「(幸子に) お嬢ちゃんは？」

幸子「姪です」

サリナ「綾の？」

幸子「(小野田を手で示し) こっちの」

○ スターボックス・店内

小野田と幸子、向かい合ってサリナが座っている。

外にはギャラリー大倉が見えている。

サリナ「仕事仲間って関係だけで、プライベ

ートは知らないわね。(店を指さし) あそ

こに客を連れ込んで売るのが」

幸子「絵ですか？」

サリナ「絵といっても印刷。二束三文のを高額で売るのが。月々分割、たった五千円で買

えますよって」

幸子「詐欺やん」

小野田「おいつ」

サリナ「詐欺よりヒドいわよ。合法だから警察にも捕まらない」

小野田「出来高制ですか？」

サリナ「そう。綾とモテない男や田舎から出てきた人、最近は富裕層の中国人に売りつけてた。多い時はOLの三倍の給料だった」

小野田「綾から連絡がありました？」

サリナ「ううん。居場所も分からない」
小野田「知り合いとかご存じないですか？」
サリナ「あの子は無駄話しないタイプだから」
幸子「男の話は？」

サリナ「(笑って) 彼氏の前でそれ聞く？
まあ、男と逃げたと考えるのが自然だけど、
彼女の場合はどうだろ」

幸子「なんでですか？」

サリナ「なんとなくよ」

と腕時計を見る。

小野田「お忙しいところ、ありがとうございます
ました」

サリナ「(立ち上がり) もし見つかったら、
連絡ください。難しいと思いますけど」

と軽く頭を下げ、店を出ていく。

窓から、ギャラリー大倉に帰っていくサ
リナの姿が見える。

○ 繁華街

幸子がスマホの地図アプリと通り過ぎる
ビルを交互に見ながら歩いている。

その後ろを付いて行く小野田。

小野田「器用な奴やな」

幸子「(指さし) アレや」

雑居ビル二階の窓に『橋本塾』の文字。

○ 橋本塾・教室

老舗の小さな塾。

外から生徒たちの声が聞こえている。

ドアが開き、橋本佳代(中)に促されて

小野田と幸子が入って来て、席につく。

佳代「ここは父の代からやってます。彼女の
事はよく覚えてますよ。面接に来た日から
教え始めました」

小野田「初日からですか？」

佳代「『やれる気がします』って自信満々に
言うんですよ。やってもらったら、これが
中々で。すぐ採用しました」

小野田「教科は何を？」

佳代「全部」

幸子「全部？」

佳代「綾さんは教えるのも上手なんですけど、生徒をやる気にさせるのが得意で。それも熱血とかそういうタイプじゃなくて……」

幸子「自然体」

佳代「そうです」

小野田「退職した時はどうでした？」

佳代「『今日で辞めます』といきなりでした。

理由を聞くと『なんか違うなあ』って」

小野田と幸子が顔を見合わせる。

佳代「あれだけでできてと思いましたがね。いくら止めてもダメで、きっぱり来なくなりました。生徒や親へのフォローが大変でしたよ」

小野田「すみません」

佳代「あなたが謝る事はないです。しかしあれだけ迷惑をかけられたのに、もう一度会ってみたいと思うんだから、おかしなもんですねえ」

二人、うつむき黙っている。

○ パンケーキ屋・店内

若い女の子で埋まっている。

小野田はコーヒーをちびちび。

幸子はパンケーキをバクバク食べている。

小野田「(幸子を見て)……」

幸子「だから太るねんて言いたいんやろ」

小野田「思っへんよ」

幸子「じゃあ、なんでジロジロ見るの？」

小野田「よく食べるなって」

幸子「一緒やん」

小野田「どう答えたら良かったん？」

幸子「『僕が半分食べて、さっちゃんの代わりに太ってあげる』が正解」

小野田「難問すぎるわ」

少し離れた席で、女の子たちが塾の宿題をやっている。

幸子「ウチも普通の塾に行きたいなあ」

小野田「普通？」

幸子「英語だけ週一で通ってるねん」

小野田「月謝は大丈夫なんか？」

幸子「大阪市から毎月一万円の塾代クーポン券が貰えるから、タダ」

小野田「へえ、今はそんなんあるんや」

宿題をする子をボーっと眺めている幸子。

小野田「次はどこ？」

幸子「ああ、ここやで」

と古い年賀状を渡す。

小野田「(見て) この人かあ」

○ 岸野古書店・店内

専門書が棚に並び、客は誰もいない。

レジ前で小野田と幸子がパイプ椅子に座っている。

店の奥から岸野太(66)がお茶を運んで来る。名前の通り丸々と太っている。

太「はい、お上がり」

小野田「どうもすみません」

とお茶を受け取る。

幸子も受け取る、その時に手が触れる。

ニヤリと笑う太。

幸子「(手を引っ込め) ……」

小野田「お仕事中に申し訳ないです」

太「大丈夫、客は滅多に来ん。今はネット販売が主や。(咳払い) あの子がおらんかったちゅう電話をもろてから、気にはなっ

てたけど。ワシにはどうしようもないわな」

小野田「綾とは遠縁にあたるんですよね？」

太「そうでんねん。親が早い事、亡くなつても、うちに来たのは高校二年の途中。

卒業まで一緒に暮らしてましてんや」

小野田「その後、お会いには」

太「全くでんな。親の法事にも来まへんわ」

小野田「連絡の方もですか？」

岸野、幸子を舐め回すように見ている。

小野田「あの〜」

太「おお、電話もあらへん。年賀状もこつちが送ったきり。…綾は不思議な魅力のある子やった。色んな所をタライ回しにされた経験があるからやろな」

小野「タライ回しですか？」

太「だから、どうやったたら人が喜ぶかを心得とる。子供の生きる本能がそうさせたんや。ところで、あんたは惚れとったんか？」

小野田「まあ、付き合ってたから」

太「ここ訪ねてきた男はあんたで三人目や」
小野田「他には誰が来たんです？」

太「六年前は新興宗教やったかな。キリスト系とか言うとった。四年前が健康食品を売ってた会社。ねずみ講やったみたいで」

幸子「(小声で) 怪しいのばかり」

太「両方とも突然辞めたみたいやわ。ホンマ、迷惑かけよって」

小野田「その人たちは、なんでここに来るんですか？」

太「あの子の住民票はこのままやからな。あんたはなんのトラブルや？ カネか？」

小野田「いえ、そんな事は」

太「今頃、ええオナゴになってるやろなあ。
(幸子を見て) お嬢ちゃんも美人になるで」

幸子「(視線を逸らし) ……」

○ 梅田界限

人通りの多い中を歩く小野田と幸子。

小野田「変わったおじさんやったな」

幸子「どんな目えしてるんよ。キモイおっさんやん。綾さんが会いたくないの分かるわ」

小野田「『さっちゃん一人でも遊びに来てや』
て言うてくれたやん」

幸子「行ったら何されるか分からん。だから綾さんも。てか、おカネの問題あったん？」

小野田「ないて言うたやろ」

幸子「ホンマは？ 誰にも言わんから」

小野田「ホンマにホンマ。……二人で結婚資金は貯めてたけど」

幸子「ほら、やっぱり持ち逃げや」

小野田「違うねん。半分だけおろしてた」

幸子「半分残ってて助かったやん」

小野田「全部持っていかれた方が救われたわ」

幸子「(何も言えず) ……」

○ 走る電車・車内（夕）

帰宅ラッシュに巻き込まれている小野田と幸子。

幸子「（ハッと思い出し）次の駅で降りるで」

小野田「なんで？」

駅に着く。幸子が小野田の手を取り、乗客にぶつかりながら下車する。

○ 霊園（夜）

照明に照らされ、夜でも明るい墓地。

幸子の後ろを小野田が付いていく。

『谷口家』の墓前で止まる二人。

小野田「谷口って誰？」

幸子「オトン」

小野田「ああ、実の父親か」

幸子が手を合わせ、小野田も手を合わせる。

幸子「オトンが死ぬまで、ウチの家族も普通

やってん。小さい庭付きの家に住んでな」

小野田「……」

幸子「亡くなって、すぐオカンが精神的にお

かしくなった。オネエも学校行かんなって、

二人が競争するようにアカンなっていった」

何も言えない小野田。

幸子「（墓に）二年ちよつとしか経ってない

のに、家族がバラバラになつてもうたわ」

小野田、厳しい表情で聞いている。

○ 小野田のアパート・表（夜）

疲れた表情で帰って来る小野田と幸子。

物陰からビニール袋を持った中井が飛び

出す。

中井「ワッ！」

二人は驚くが、中井も幸子を見てギョとなる。

中井「えー、ちょい待ち。どういう関係？」

小野田「（幸子に）先帰つといて」

とカギを渡す。

幸子は受け取り、部屋に入っていく。

中井「新しい彼女には早過ぎだし若過ぎだし」

小野田「何も聞かんと帰ってくれ」

中井「無理無理無理無理。説明するまで、ゼッテー帰らないっス」

小野田「面倒くせえ」

○ 小野田の部屋・居間（夜）

汗をかきながら、そうめんを湯がく幸子。

ビニール袋を持って小野田が帰って来る。

幸子「もうすぐできるわ」

小野田「色々回ったけど、収穫無しやったな」

幸子「綾さんの事、いっぱい知れたやん」

小野田「あいつ、何モンや？」

幸子「え？」

小野田「得体が知れん。何が現実か分からんようになつてきた」

幸子「腹減った二人がここにおるのが現実や」

と座卓に食べる用意をする。

小野田も手伝う。

幸子「よし、食べよ」

小野田・幸子「いただきます」

ズルズルとすする二人。

幸子「ちよつと芯あるわ」

小野田「これくらいが好きやけど」

幸子「ウチも」

二人がひたすら食べる。

そうめんが少なくなってくる。

幸子「まだあるけど、おかわりする？」

小野田「いたただくわ」

幸子が台所に行き、残りを湯がき出す。

幸子「今日、聞いた話をまとめると綾さんは

一年から一年半で姿を消すパターンやな。

おっちゃんとの同棲はどれくらいやった？」

小野田「（指折って）……ちよつど二年か」

幸子「おっ、新記録」

小野田「自慢にならん」

幸子「でも、あれやな。どの人も、綾さんの

話をする時は楽しそうやったわ」

小野田「しかしどの人とも今は連絡付かず。

あいつは冷たい人間や」

幸子「逃げられた方はみんな未練あるのにな」

小野田「……」

失言したのを誤魔化すように、そうめんを元氣よく運んでくる幸子。

幸子「さあ、お食べ。完璧な硬さやで」

小野田が豪快にすすす。

幸子「このそうめんは色付いたの無いな」

小野田「ピンクとかの？」

幸子「小さい頃、オネエと取り合ってケンカした事あるわ」

小野田「あれ、なんのために入ってるんや？」

幸子「子供が喜ぶからちゃう」

小野田「いや清涼感ちゃう」

幸子「どっちでもいいけど、次は色付き買って来てな」

小野田「任せとけ」

食べていると、急にニヤニヤし出す幸子。

小野田「だらしない顔して、どないした？」

幸子「こういうのが幸せって言うんかなって。

おいしいの食べながら、バカ話して」

小野田「中二のくせに大人びた事を」

幸子「だって」

小野田が突然、オナラをする。

幸子「こらッ、ごはん中やで。臭ッ、めっちゃ臭いやん」

と窓を開け、うちわで臭いを追い出す。

小野田「食後は貰ったやつで、もつと幸せになろうぜ」

幸子「何言うてんの」

小野田がビニール袋を渡す。

覗く幸子、表情がパツと明るくなる。

○ 小野田のアパート・裏（夜）

花火をしている小野田と幸子。

水の入ったバケツに、終わった手持ち花火が何本も刺さっている。

幸子「ええ人やね。落ち込んでる先輩に花火を買って来てくれるなんて」

小野田「店の商品を盗んだだけや」

幸子「ホームセンターって花火もあるの？」

小野田「なんでもあるで。部屋の物は、ほと

んど店で揃えたからな」

幸子「首吊りの縄も？」

小野田「え？」

固まったまま見つめ合う二人。

幸子「……自殺するの、ウチ見ててん。(上を指さし) あそこで」

そこには幸子の部屋のベランダがある。

小野田「(見上げて) ……」

幸子「夕立が来そうやったから、洗濯物取り込もうと思つて慌ててベランダに出たら、

(雑木林を見て) 丸見えやつてん」

小野田「えらいトコ見られたな」

幸子「爆笑してもうた」

小野田の硬い表情が徐々に笑顔に変わる。

小野田「大型犬の糞まみれになってサイテーやったわ」

幸子「ううん、サイコーやった」

と大笑い。

小野田「失礼やで。ま、僕も笑ったけど」

幸子「ガチでウケた」

小野田「何回言うねん」

急に真剣な顔になり、黙り込む幸子。

小野田「どないしてん。笑うか、真面目か、

花火するか、どれかにしろや」

幸子「……あの時、家族は誰も帰つて来うへんし、おカネも残り少ない、ウチの人生は

どうなるんやろつて、めっちゃ落ち込んで」

小野田「そのタイミングで爆笑か？」

幸子「(うなずき) ドキドキして見てたら、

パンツ一枚で帰つて来るねんもん」

小野田「人の生き死にを楽しみやがって」

幸子「笑うの堪えながら、英語の塾に行った

わ。ホンマ、ありがとう」

小野田「お役に立てて良かった。あれで、二人の人間が助かってんな」

小野田と幸子が練香花火に火をつける。

黙つて火花を見つめる。

○ 小野田の部屋・寝室(夜)

夜中、ベッドで何度も寝返りをうつ幸子。

幸子「(眠れず) あー」
と座り込む。

○ 同・居間(夜)

薄暗い中、寝ている小野田。

そこに枕を持って幸子がやって来る。

幸子「こっちで寝ていい？」

小野田「寝室もクーラーつけたらいいのに」

幸子「もったいないやん」

と枕を置いて寝転ぶ。

部屋がシンとなる。

幸子「……寝た？」

小野田「すぐ寝られるかい」

幸子「なんで自殺しようと思ったん？」

小野田「そんな質問、よくできるな」

幸子「気になって寝られへん」

小野田「何もかもイヤになったから。以上」

幸子「彼女に逃げられただけやろ」

小野田「仕事も上手いこと行かんし、家族も

おらん。真面目に生きてきたのに全部がど

ん詰まりや。……あとハゲてきたし」

幸子「なにそれ」

小野田「どうでもええわって、ヤケを起こし

た感じやな」

幸子「あとな」

小野田「(さへぎり) 寝させてくれや」

幸子「首吊りを選んだのはなんで？」

小野田「なんとなく」

幸子「テキトーやん」

小野田「だから失敗した」

幸子「成功しても片付ける人は大変やで。こ

こに住んでる人や大家さんにも迷惑やし」

小野田「大家さんにはさっちゃんも迷惑かけ

てる」

幸子「ウチやなくて親や。ていうか、火サス

みたいに崖から飛び降りたら、死体も出て

来ないから良かったんちゃう？」

小野田「……」

幸子「なあって……寝たん？」

と這って小野田の近くに行く。

小野田「しつこい女」

幸子「答えるまで待つで」

小野田「あのな、自殺しようという人間はそ

こまで考える余裕がないねん」

幸子「迷惑とか？」

小野田「自分を殺す事しか考えてない」

幸子「……」

小野田「昔は電車に飛び込む奴にムカついてたけど、今はそんな風に考えへん。家族に賠償金を請求するのも反対や」

真剣に話を聞いている幸子。

小野田「人間がああ状態になったら、もうどうにもならん。周りのヒトがそれを理解し
たらなアカンと思う」

幸子「……ごめん……ごめんなさい」

小野田「分かったから寝よ」

Tシャツをまくり上げる幸子。

幸子「(肩を叩き) おっちゃん、おっちゃん」

小野田「なんやねん」

目を開けた小野田、幸子の胸を見て驚き、
すぐに背を向ける。

小野田「(パニックで) はよ、服直せッ！」

幸子「今ので許してくれた？」

小野田「アホか」

ケラケラ笑う幸子。

小野田「何がオモロイねん」

幸子「(大笑いして) ヘタレやなあ」

小野田「アツチ行け、シツシツ」

幸子「野良犬ちゃうわ」

○ (小野田の夢) 小野田の部屋・居間

朝。セミがやかましく鳴いている。

寝ている小野田と幸子。

幸子がけだるそうに起き上がる。

服を着ておらず、美しい裸の後ろ姿。

小野田も目を覚ます、幸子を見て驚く。

小野田「あっ！」

振り返る幸子、しかしそれは綾だった。

綾「なんか違うなあ」

小野田「(パニックで) あああああ」

○ 小野田の部屋・居間

朝、うるさくセミが鳴いている。

跳ね起きる小野田。

幸子は服を着て、眠っている。

小野田「(呼吸が荒く) はあーはあー」

幸子も目を覚ます。

幸子「どうしたん？」

小野田「(安堵して) 良かった……助かった」

幸子「何が？」

小野田「(呼吸はまだ荒く) はあーはあー」

○ 小野田のアパート・表

幸子が自転車のカギを外している。

慌ててやって来る小野田、袋を自転車の

前かごに入れる。

幸子「コンビニで買うのに」

小野田「せっかく作ってんから」

そこに東山慎太郎(32)が来る。

黒縁メガネで黒スーツ、真面目そうだ。

東山「小野田さんですよね？」

小野田「そうですか」

東山「私は東山と申します。サリナの夫です」

小野田「サリナ？」

幸子「絵を売ってたキレイなお姉さん」

小野田「ああ、綾の同僚の方の……それが？」

東山「離婚届を置いて、いなくなりました」

小野田・幸子「え！」

東山「連絡もつかない状態で。小野田さんの

彼女も関係してるんです」

小野田・幸子「ええ!？」

東山「折り入ってお聞きしたい事が」

小野田「分かりました。しかし僕の家がよく

分かりましたね。もしかして探偵さん？」

東山「まあ、そんな感じですよ」

小野田「(幸子に) 遅刻するぞ」

幸子「めっちゃ気になるねんけど」

小野田「(追い払うように) シッシッ」

幸子「だから野良犬ちゃうって」

としぶしぶ自転車で去って行く。

○ 小野田の部屋・居間

東山が座っていると、小野田がホットコーヒーを運んでくる。

小野田「市役所勤めですか。私はホームセンターで働いてまして、今日は休みです。すみませんね、アイスがなくて」

東山「お気になさらず」

小野田「……でも、信じられません」

東山「本当だから来ました。明日も仕事を抜けて、妻を探しに行く予定です」

小野田「サリナさんが両方イケたとしても、綾はそっちの趣味はないので」

東山「小野田さんは、彼女たちが親しい関係だという事実さえ知らなかった」

小野田「しかし、自分の恋人がそういうのかどうかくらい分かりますよ」

東山「二人で逃げているのは間違いない。そしてレズビアンバーで働いてるはずです」

小野田「まさか」

東山「もしくはバイセクシャルバー」

小野田「バイ……本人から聞いたんですか？」

東山「メールやLINEを盗み見しました。」

二人で色んな店にも通い、体験入店までしました。働く下調べだと思います」

小野田「でも確実にレズと言えないでしょ？」

東山「現場を見ました」

小野田「現場を？」

東山「スマホの動画ですが。お互いのカラダをまさぐりあっていました」

小野田「そんな事、言われてもなあ……」

東山「セックスストレスだったでしょ？」

小野田「二年も同棲したらそうなりますよ。」

それに彼女たちが望んで出ていったなら、仕方ないじゃないですか」

東山「元々はあなたが綾さんをしっかりと見張ってないのがダメなんです」

小野田「あなたも逃げられたでしょ。いや、捨てられたんや。その現実をまず認めてください」

東山「悔しくはないですか、恋人に逃げられて。」

元の生活に戻りたくないんですか!」

興奮して震える手でコーヒーカップを持つ、すると取っ手が外れる。

東山「あっ、すみません」

小野田「(笑顔で)それ前にも取れたんです。

気にせんとって下さい」

東山「……」

小野田「東山さん、その取っ手は僕らと一緒に」

東山「何がですか?」

小野田「一度、離れた関係はくっつけてもダメになる。元には戻らないんです」

東山「(取っ手を持ち) 何度も付けたらいい

んです。取れても取れても」

小野田「でも元通りにはならん」

東山「形だけでもいい! この気持ちをあなたには分かって貰えると思ってたのに……」

小野田「そら悪かったな」

怒りで唇が震えている東山。

○ 英語塾・教室

休憩時間で、生徒がお弁当を食べている。

小野田に貰った袋からお弁当を出す幸子。

ゆっくり開けると、日の丸ご飯と卵焼き

だけの男らしい弁当。

幸子「うわっ」

幸子、フタで隠すようにして食べ始める。

周りの生徒たちがチラチラ見ている。

○ 小野田の部屋・居間

パソコンでレズビアンやバイセクシャル

など調べている小野田。

小野田「アホらし」

と寝転ぶとお腹が鳴る。

小野田「昼ごはん喰うの忘れてたわ」

手を伸ばし、スマホを取る。

LINEを見ると幸子から『おっさん弁当、ハズいねん!』。

小野田「スマホでも怒ってるで」

○ 英語塾・表

生徒が帰って行く、幸子も出て来る。

小野田の声「さっちゃん！」

少し離れたところに小野田が待っていた。

周りの生徒たちが幸子に注目する。

幸子、知らんぷりで自転車にまたがり行ってしまう。

小野田「おい、待たんかい」

と走って追いかける。

○ 住宅街

幸子が自転車を押して歩く。

隣には小野田がいる。

幸子「ああいうの、やめて。ウチ、外では目

立たん系やから」

小野田「学校でもそんな感じ？」

幸子「テキストにみんなに合わせて、上手い

事やってる。てか、何しに来たん？」

小野田「おいしい焼きそば、喰いたくない？」

幸子「もちろん喰いたいけど、さっきお弁当

食べたばかりやから」

小野田「よっしゃ、時間潰しに話があるねん」

幸子「そうそう、あのヒトは何て言うてた？」

綾さんは見つかりそう？ 無理そう？」

小野田「焦るな焦るな」

○ 公園（夕）

小野田と幸子がブランコに乗っている。

幸子「ありえへんと思うけど……」

小野田「けど？」

幸子「ウチより、綾さんの近くにおったから

おっちゃんの方が分かるやろ？」

小野田「分かってるつもりやった。でも、こ

こ数日で、あいつの事をなんも知らんかつ

たと思いき知らされた」

幸子「自分を信じなアカンって」

小野田「むちゃ言うなや」

ぴよんとブランコを飛び降りる幸子。

幸子「(振り返り) 行くぞ」

小野田「どこへ？」

幸子「焼きそば」

小野田「腹減ってないで、さっき言うたやん」
幸子「今は減ってる。ウチは成長期やねん」
小野田「もう成長せんでええやろ」
幸子「なんて？」

小野田が自転車を取りに行き、幸子の前に来る。

小野田「姫、どうぞ」
幸子「よろしい」

と荷台に座り、颯爽と去って行く。
二人の後ろ姿に夕陽が当たっている。

○ ブスの店・店内（夜）

暗めの照明で飲み屋になっている。
奥の席に小野田と幸子が座ってる。

幸子「この店やとは予想してなかった」

小野田「夜はスナックになるねん。騙された
と思っって食べてみ」

二人の前に焼きそばを置くママ。

ブスのママ「どうぞ」

幸子「ウチら恋人です」

小野田「おいッ」

ブスのママ「あら、しつかりした子」

幸子「尻に敷いてます」

ブスのママ「男と女はその方がうまく行くで」

小野田「アホか。こんな子供なんか」

ブスのママ「彼女へ偉そうに言いな」

幸子「二人の時は優しいんですよ」

ブスのママ「ごちそうさま」

と行ってしまふ。

小野田「店出るまでにウソやっただて、言えよ」

幸子、無視して食べ始める。

幸子「ヤバッ、めっちゃ旨い！」

小野田「な、スパイスが効いてるねん」

幸子「(食べながら)今日は早く寝るで」

小野田「(食べながら)夜中にサッカー日本

代表の試合あるから無理」

幸子「アカン、明日は東山さんとレズビアン

バー回るねんから」

小野田「綾は、やっぱりそつちか？」

幸子「違うと思うけど、手掛かりはそれしか

ない。とりあえず動こうや」

小野田「氣に乗らんなあ」

幸子「……実は、おっちゃんに言うてない事あるねん。大事な話で」

小野田「なんやねん？」

幸子「綾さんが出て行った時な」

小野田「前日にベランダで喋ったんやろ」

幸子「いなくなつた日の夕方も見てん」

小野田「夕方？ まだ働いてる時間やで」

幸子「だから、おかしいと思つて覚えてる。

塾から帰つて来たら、アパートの前で男の人とそこそそ話してた」

小野田「オトコか。それは聞きたくなかつた」

幸子「氣になつたから、家入る前にもう一回確認してん」

小野田「オバハンみたい」

幸子「オンナはみんなそうやねん」

小野田「で？」

幸子「後ろ姿だけやけど、めっちゃ細かつた」

小野田「ガリガリ君か」

幸子「……」

小野田「続けて」

幸子「思い出してみたら、あんな痩せてる男なんかおらへん」

小野田「サリナさんやつた？」

幸子「かもしれん」

小野田の手が止まる。

幸子「食べへんなら、ウチが貰うで」と箸を伸ばす。

その手をパチンと叩く小野田。

ママがカラオケを歌い出す。

プロ並みの歌唱力で驚く二人。

○ 住宅街

今日も午前中から暑い。

小野田と幸子、その後ろを中井が付いて歩いている。

中井「(手で汗をぬぐい) あっちい。先輩、

パート連中にいっぱい目撃されますよ。

二人は親戚だと誤魔化しましたけど」

無視して歩く小野田。

中井「新店長とパートのバトルが凄いいんすよ。客前でもやり出しちゃって、クレームまで来て。とうか、今からどこ行くんすか？」

小野田「(面倒そうに) デートデート」

中井「またまた」

小野田「ホンマや」

幸子「昨日もエッチしたし」

中井「マジっすか!？」

二人、駅の方に歩いて行く。

立ち止まる中井、後ろ姿を見つめる。

中井「……俺も有給取るっかなあ」

○ 阪急東通り商店街・アーケード
人通りが多い。

小野田と幸子が商店街入口で立っている。
うだるような暑さで汗が止まらない。

小走りでやって来る東山。

東山「すみません。なかなか抜けられなくて」

小野田「休みの日でも良かったのに」

東山「気になって仕事にならないです。とりあえず、涼しいところに移動しましょう」

○ カラオケボックス・個室

ソファに座っている小野田と幸子と東山。
ノートPCで、東山が説明をしている。

東山「大阪のゲイタウンは三つ、この近くの堂山。あと難波四丁目と新世界。新世界は毛色が違うので外します」

小野田「何店舗くらいありますか？」

東山「ゲイ関連は、大阪に200です」

幸子「200!」

東山「レズやバイは、その内10%もありません。だから一日で全部回れます」

小野田「よく調べたわ」

幸子「今はネットがあるから」

東山「ネットだけでは不十分なんで、他でも調べました」

小野田「他って？」

東山「私は役所で働いていますので」

小野田「色々な情報が見られるって事？」
そこに店員が入って来る。

カラオケ店員「コーラとアイスコーヒーが二つです。失礼します」

と去って行く。

小野田と幸子が、東山を見つめる。

東山「……ご想像にお任せします」

○ 堂山

路地裏。古い雑居ビルが立ち並び、派手で卑猥な看板が多い。

道幅は狭く、歩く人たちも怪しく見える。

そこを小野田、幸子、東山が進む。

幸子はずっとスマホを見ている。

小野田「ナビはこいつが得意なんで」

東山「(幸子に頭を下げ) お願いします」

幸子「任せて下さい」

小野田「この時間に行って、ヒトいますか？」

東山「ちょうどオープンの準備をしている頃

だと思えます。掃除とか、仕入れの」

小野田「ずっと気になってるんですが」

東山「なんででしょう？」

小野田「僕らにきちんと話してくれますか？」

東山「そっちは大丈夫です」

急に立ち止まり、雑居ビルを指さす幸子。

幸子「ここです」

四階に『ナチュラルウーマン』の看板。

○ ナチュラルウーマン・表

小野田と幸子が中を覗いている。

東山が躊躇なくノックする。

ドアが開き、女性店主が顔を出す。

女性店主「オープンは八時からですよ」

東山「私たちは客ではありません」

女性店主「(急に横柄になり) じゃあ、何？」

東山「大阪市役所からまいりました」

女性店主の顔が一瞬でこわばる。

○ 同・店内

オシャレな感じの店。

小野田と幸子は落ち着かない。

東山は女性店主に説明している。

東山「今回の立ち入りは、正式なものではないので硬くならないで下さい」

完全に萎縮している女性店主。

東山「(小野田を手で示し) 労働基準監督署の小野田さん」

小野田「(頭を下げ) よろしく」

東山「(幸子を手で示し) NPO法人『若者の働き方』代表の北島さん」

幸子「(頭を下げ) どうも」

東山「早速ですが現在、問題になっているブ
ラック企業の調査でお伺いしました。特に
飲食店での労働環境の苦情が多く」

女性店主「うちは大丈夫です」

東山「では、この店で働いている、または以前働いた経験のある人の名簿があれば出して頂きたいのですが？」

女性店主「……」

東山「協力的でないと、お店にとって良いこととは何もないと考えて下さって結構です」

女性店主「それは営業許可に影響とか」

東山、顔色ひとつ変えず店主を見つめる。

女性店主「……少々お待ちください」

と店の奥に消える。

小野田と幸子、感心して東山を見る。

○ ツインズガールズ・店内

開店準備中の店。双子のレズ店員と話し込んでいる小野田と幸子と東山。

双子レズ1「みんなテキストに書いてっから」

双子レズ2「アテにならないって」

東山「それでも大丈夫です」

迷った挙句、名簿を東山に渡す双子。

東山「ご協力に感謝します」

頭を下げ、出ていく三人。

○ マシユマロ・表

萌え系レズバー。フリフリ衣装のメイド女子がドアの前に立っている。

しかしよく見るとかなり年配だ。

小野田、幸子、東山が囲んでいる。

東山「責任者の方はいつお戻りに？」

メイド「バイトだから知らないんですの」

東山「帰られるまで中で待たせてもらいます」

メイド「メーワクメーワクですの」

幸子「おばちゃん、バレてるで」

メイド「おばちゃんじゃないですの」

小野田「こっちは、あんたが責任者の山田良

子才って分かってるねんで」

メイド「(素に戻り) それ先言うて」

と店のドアを開ける。

入っていく小野田たち。

○ 走るタクシー・車内

後部座席に小野田と幸子、助手席の東山

はノートパソコンで何か調べている。

小野田「名簿の名前って偽名やないですか？」

東山「だから携帯電話の番号だけ調べてます。

データベースと照合したら契約者が分かり

ますから。二人のはまだ無いですね」

小野田「そういうのって」

東山「もちろん違法です」

小野田「……」

幸子「もう半分くらいの店は行きました？」

東山「半分以上ですね。残りは難波だけです」

小野田「やっぱり見つけるのは厳しいか」

東山「諦めず一軒一軒、回るしかないですね」

○ とあるバイセクシャルバー・表

地下の店、シャッターが閉まっている。

小野田と幸子と東山が、隣の店の従業員

に話を聞いている。

従業員はずつと首を横に振っている。

○ とある雑居ビル・表

ビルの取り壊しをしている。

解体業者の話聞く小野田と幸子と東山。

解体業者「(ビルを見上げ) テナントは二週

間前にみんな出ってたよ」

○ コンビニ・表（夜）

小野田、幸子、東山が駐車スペースに座って休憩している。

陽は暮れたが温度は下がらず、三人はソーダアイスを食べている。

突然、幸子が物陰に隠れる。

小野田「どないした？」

幸子「（小声で）同じクラスの子がおるねん」

視線の先には女子中学生二人がいた。

小野田「挨拶したら？」

幸子「（小声で）あの子ら、話長いから」

去って行く女子中学生たち。

小野田「（時計を見て）遅いから先帰るか？」

幸子「ここまで付き合ったから最後までおる。で、次はどこ？」

東山「すべて回りました」

幸子「新世界は？」

東山「あの地域の店はテイストが異なるので」

幸子「行ってみないと分からんやん」

小野田「東山さんはきちんと調べてはるねん」

幸子「でも絶対なんてないと思う」

東山「一店だけ怪しいがあるので、そこに行ってみましょうか」

立ち上がり、東山と幸子が歩き出す。

小野田「はいはい、分かりましたよ」

と重い腰を上げ、後を追う。

○ 恵美須町駅・出口（夜）

地下階段を上ってくる小野田と幸子と東山。

外国人が多く、観光地になっている。

近くに通天閣も見える。

○ 新世界（夜）

入り組んだ裏通り。

観光客はおらず、地面に寝ているおじさん、酔っ払いのおじさんが大勢いる。

小野田、幸子、東山がそこを歩く。

小野田「少し裏道に入ったら昔のままやな」

東山「これでも相当キレイになったんですよ。」

以前はホント、スラム街のようで」

幸子「(スマホを見ながら) ここら辺やけど」
東山「あっ、ありましたね」

五階建ての雑居ビルがある。

ねずみ色で古ぼけているが、最上階『楽園』は七色のペイントで目立っている。

○ 楽園のビル・エレベーター(夜)

古いエレベーターに乗っている小野田と幸子と東山、機械のきしむ音がする。

五階に着き、ドアが開く。

派手な照明がまぶしく、ユーロビートの曲がガンガン聞こえる。

目が点になる三人。

○ 楽園・店内(夜)

カウンターで酒を飲むゲイ、フロアで踊るトランスジエンダー、隅でイチヤイチヤしてるレズ、バイ、ノンケと様々いる。東山がバーテンと話をしている。

少し離れて待つ小野田と幸子。

小野田「確かにここは雰囲気ちゃうな」

幸子「……綾さんが突然いなくなる気持ち分かかった気がする」

小野田「突然なんや」

幸子「今の生活には未練なかったんやわ」

小野田「……」

幸子「おっちゃんとかって事やなくて、いや関係あるか」

小野田「意味が分からん」

幸子「ウチは現状を変えられるのがイヤやねん。家族が増えたり減ったりするのが」

小野田「いつもと一緒にが好き？」

幸子「うん。急な変化で傷ついて来たから。でも綾さんは逆なんちゃう」

小野田「同じがイヤ？」

幸子「そんな気がする」

小野田「じゃあ、ずっと一緒にのヒトと暮らすなんか」

幸子「サイアク……知らんけど」

小野田「言うと思った」

幸子「でも、綾さんはおっちゃんも二年も同居してたから居心地は良かったと思う。重

大なきっかけがあつて出てったはずやねん」

小野田「重大なきっかけ？ 思いつかんなあ」

東山「やって来た。

東山「会っていただけみたいですよ」

○ 同・スタッフルーム（夜）

ごく普通の従業員の控室。

店内の曲が漏れ聞こえている。

そこでオカマのママがパソコンで売上のチェックをしている。

話しだすのを待つ小野田、幸子、東山。

オカマのママ「……今の時代だから従業員データは全てこのパソコンに入ってる。うちは系列で何店舗もあるから」

東山「そのデータも」

オカマのママ「もちろん、入ってるわよ」

東山「では、そちらのも」

オカマのママが立ち上がる。

身長2m近い大オカマだった。

オカマのママ「渡すわけねーだろ！ 世間に隠れるように生きてる人間もいるんだ！」

小野田・幸子・東山「……」

オカマのママ「ここは戦後すぐにできたマイノリティ全員を受け入れる店だ。サツでも何でも連れて来い。邪魔するなら、お前らも喰ってやろうか！」

縮み上がる小野田たち。

そこに武器を持ったオカマ三人が現れる。

小野田「し、失礼しましたッ！」

と二人の腕を引っ張り、慌てて出ていく。

○ 串カツ屋・店内（夜）

小野田と幸子と東山がカウンターに並んで座っている。

東山は食べたり飲んだり忙しい。

幸子「明日はどうするんですか？」

東山「仕事を頑張ります」

幸子「奥さん探しは？」

東山「(きっぱり) 諦めました」

幸子「え……範囲を広げたら見つかるかも」

東山「見つけてどうなります？」

驚いて声が出ない小野田と幸子。

東山「今日で終わりにしようと思ってました。

小野田さんに初めてお会いした時、はつき

りとおっしゃりませんでした。お前は

ストーカーだと言われた気がしました」

小野田「……」

東山「自分でも分かってましたが、情けなく

なってる」

幸子「じゃ、今日はなんやったん？ クタク

タなるまで歩いて、ビクビクしながら話聞

いて、殺されそうになりながら逃げたのに」

小野田「(さえぎり) やめとけ」

東山「……お二人には、わがままに付き合わ

せて本当に申し訳ありませんでした」

と深々と頭を下げる。

小野田・幸子「……」

二人の手は完全に止まるが、東山は食べ

たり飲んだりを再開する。

東山「ここは私が払いますから、どんどん注

文して下さい。(店員に) 生中おかわり」

小野田「じゃ、僕も遠慮なく」

とごくごくとビールを一气飲み。

幸子はうつむき黙っている。

○ 道頓堀界限 (夜)

小野田と幸子に、何度も頭を下げ去っ

て行く東山。

すぐ人ごみに紛れてしまう。

○ 駅く住宅街 (夜)

遅い時間で、駅前の人は少ない。

駅から小野田と幸子が出て来て、トボト

ボ歩きだす。

小野田は顔が少し赤く、ほろ酔いだ。

幸子「このまま探したら、綾さんたち見つか

る気がするねんけど」

小野田「(夜空を見上げ)今日は星が綺麗や」
幸子「絶対とは言わんけど、女の勘やねん。
ウチのはよく当たるで」

小野田「(夜空を指さし)夏の大三角形。デ
ネブ、ベガ。それから……」

幸子「アルタイル。てか、話聞ってる？」

小野田「聞ってる聞ってる。……綾はこの世
におらん気がする」

幸子「死んだって事？」

小野田「死んだと同然。向こうの星に行つて、
もう会えんのか」

幸子「おっちゃん酔ってるの？」

小野田「あいつにとつて、僕らはもう終わつ
た存在。死人と一緒にやねん」

幸子「……」

黙って歩く二人。

小野田「ちよつとこつち来て」

幸子「ん？」

小野田、ハア〜と息を吹きかける。

幸子「酒くせえ！」

大笑いする小野田。

怒った幸子、お尻を蹴り上げる。

小野田「痛ッ！」

○ 小野田の部屋・居間(夜)

熟睡している小野田。

幸子はパソコンでレズ情報を調べている。
時計は夜中の三時を指している。

○ 小野田のアパート・表

ボサボサ髪の小野田が出てくる。

追ってくる幸子。

幸子「今日の予定やねんけど」

小野田「予定？」

幸子「神戸にレズバーが二軒あるねん。まず、

そっちに行つてからバイ」

小野田「(ささげり)もう終わったんや」

幸子「中途半端やん。決着ついてへんで」

小野田「こんなモンに決着なんてない」

幸子「……怖いんやろ？」

小野田「はあ？」

幸子「綾さんに直接、フラれるのが耐えられへんのやわ」

小野田「直接も何も、完全にフラれてる」

幸子「じゃあ、会って聞こうや。今のままやと逃げてる事になるで」

小野田「それで構わん」

と行こうとする。

その腕をつかんで止める幸子。

幸子「ウチ、一人でもやるから」

小野田「お前は……」

幸子「なによ？」

小野田「もうええ」

と行こうとするが、また腕を掴まれる。

幸子「このままやとヘタレやで！」

小野田「ヒトの心配より、クズ家族探せや！」

幸子「(涙を浮かべ)……」

居たたまれず去る小野田。

○ 小野田の部屋・寝室

幸子がベッドで綾の写真を見ている。

直そうと引き出しを開ける。

奥の方から小さな箱が出てくる。

開けると、婚約指輪が入っていた。

幸子「(じつと見つめて)……」

スマホを手にし、何かを調べ始める幸子。

幸子「……あつ」

画面には新規オープンのレストランのHPが映っている。

店内画像にはアールデコ調の家具を揃え、

店名は『S & A』。

幸子「サリナと綾。絶対、これや！」

と立ち上がり、慌てて出ていく。

○ 同・表

急いで出てくる幸子。

幸子の部屋前の張り紙を呆然と見つめる女性がいる。

母・北島みさ江(43)。ホスト遊び、アール中、ギャンブル依存症には見えない。

普通の主婦のような風貌だ。

二人は驚き、黙って見つめ合う。

みさ江「……あなた、なんでその部屋から」

幸子は何も答えず走り去る。

みさ江「ちよっと！」

○ ブスの店・店内

小野田がレジでおカネを払っている。

ブスのママ「若い彼女は？」

小野田「逃げられた」

ブスのママ「またかいな」

○ 小野田の部屋・居間

そーっと帰って来る小野田。

見渡すが幸子はいない。

ゴロンと寝転ぶ小野田、幸子のいた場所

はポツカリ空いている。

スマホを手にし、LINEを打ち始める。

○ 走る電車・車内

ポツンと幸子一人だけが座っている。

○ 小野田の部屋・ベランダ

小野田が洗濯物を持って来る。

慣れない手つきで女物を隠すように干す。

ポケットからスマホを出し、LINEを

確認する、未読のままだ。

窓際の風鈴が寂しく鳴る。

○ 京都河原町駅・表

家族連れやカップルや若者グループ、み

んな楽しそうにしている。

そこをキョロキョロしながら歩く幸子。

○ 住宅街

キョロキョロしながら歩いている小野田。

前方を見ると幸子が歩いていた。

小野田、嬉しそうに駆け寄る。

小野田「心配したやんけ」

振り返ると別人だった。

小野田「あつ、すみません」

○ 祇園

幸子が一軒のビルに近づく。

古都ビルの入口に提示してあるテナント看板に、三階『S & A』の文字。

幸子「よっしゃ」

と気合を入れて中に進む。

○ 古都ビル・エレベーターホール

待っている幸子、ドアが開く。

入ろうとすると警官二人が降りてきた。

幸子、一瞬ビクツとなるが平然として乗り込む。ドアが閉まる。

○ S & A・表

幸子がノックする、反応がない。

もう一度しようとするど肩を叩かれる。

振り向くと、さっきの警官二人組だった。

幸子「あっ！」

と言うと同時に走り出した。

警官1「おい、待たんか」

非常階段を駆け下りる幸子。

○ 祇園

スマホ片手に激走する幸子、後ろから警官1

が追いかけるが距離は離れていく。

幸子は逃げきれたと余裕の表情になる。

幸子「(電話に) 綾さんの店、分かったで」

小野田の声「え？」

幸子「(電話に) 京都祇園の古都ビル三階」

先回りしていた警官2が現れる。

幸子「うわっ！」

とギリギリよける。

○ 公園

ベンチで電話を受けている小野田。

スマホからは荒い呼吸だけが聞こえる。

小野田「(電話に) どないしてん！」

幸子の声「ウチは鬼ごっこ中やねん」

小野田「(電話に) はあ?」

幸子の声「絶対に行つてや。じゃ(切れる)」

小野田が電話を折り返すが、繋がらない。

○ 止まっているパトカー・車内

後部座席に幸子、運転席に警官1がいる。

幸子、逃げだそうとドアに手をかける。

警官1「簡単に出れないようになってるから」

幸子「いえ、トイレに行こうと」

警官1「みんな、そう言つて逃げようとする」

幸子「……」

助手席のドアが開き、乗り込む警官2。

警官2「君は人探しをしたみたいだけど、

君自身もお母さんに探されてるよ」

幸子「……」

警官2「警察署まで迎えに来て貰うからね」

○ 駐車場

小野田が車に乗り込み、走り去る。

○ 下京警察署・表

警察署から出てくる幸子とみさ江。

みさ江「パパかお姉ちゃんがおると思つてて。

まさか、幸子一人やったなんて」

幸子「……」

みさ江「ホンマ、すみません」

ずっと無視して歩く幸子。

みさ江は恐縮しながら付いていく。

○ 走るみさ江の車・車内(夕)

運転するみさ江、助手席の幸子は下を向

いている。

みさ江「娘にこんなん言うの恥ずかしいけど。

ママ、好きなヒトができたんよ。今までの

生活を捨てようと思うぐらいの大恋愛」

幸子「……」

みさ江「携帯を買い換えて、新しい人生を歩

み出した。でも、いつもの悪いクセでパチ

ンコにハマつて。それが原因で三か月も持

たんかった」

幸子「……」

みさ江「久しぶりに家へ帰って来たなら、あの状態です。そこに、ちょうどあんたが現れた。今まで、隣でお世話になってたの？」

幸子「(窓外を見て)……」

みさ江「……言いたくない事もあるわよね。

あの後、大家さんに謝りに行った。家賃も払ったから部屋にはもう入れるよ」

幸子「……」

みさ江「(真剣な表情になり)あのね……パ

パ、脳出血で入院してるって。家の留守電に連絡が入ってたの」

幸子、驚いて初めてみさ江の顔を見る。

みさ江「仕事の休憩中に体調が悪くなって、助けを求めに入ったコンビニで倒れた」

幸子「……」

みさ江「乗ってたトラックは駐車違反でレッカーで運ばれて、身元の分かるモノがなかったから誰か分からなかったみたい」

幸子「……」

みさ江「三日前に意識は戻ったけど、首から下は麻痺で名前もはっきり言われへん」

明かりが点き始めた街並みを黙って眺める幸子。

○ 祇園(夜)

完全に迷っている小野田、スマホを上下左右に動かすが分からない。

小野田「あんな説明で分からん。あのアホ女」
LINEを見ると幸子から古都ビルの画像が届いていた。

小野田「やっぱり、あいつはできる女やで」

と周りを見る、目の前が古都ビルだった。

小野田「ここやん」

○ S & A・表(夜)

営業中の店を覗いている小野田。

そこに気の強そうな女性客1が来る。

女性客1「ここ、男だけじゃ無理だから」と入って行く。

○ 同・店内（夜）

薄暗い中、女性の客で埋まっている。

ゆっくりドアが開き、入ってくる小野田。

さっきの女性客1が近づいて来る。

女性客1「だから、お前一人じゃダメだつて。

もしかして外人？ 日本語分かんない？」

クスクス笑う客たち。

小野田「責任者と話したいねんけど」

女性客1「こいつ何様だよ」

他の客も「帰れ」「警察呼ぶよ」と罵声

を浴びせる。

騒ぎに気づき裏から、店員が出てきた。

サリナだ、髪はベリーショートで男装を

している。

小野田はカウンターに向かう。

サリナ「見つかったわね。元旦那も一緒？」

小野田「（首を左右に振り）東山さんはあな

たの事を諦めました」

サリナ「あいつ、悪い奴じゃないんだけど…

…キモイ。今は一緒の空気を吸うのもイヤ」

小野田が座り、サリナが前に立つ。

小野田「綾との関係はそうなんか？」

サリナ「そう？ ああ、彼女はノンケよ」

小野田「東山さんは、二人がデキてると思っ

てたで」

サリナ「何度かエッチはしたの」

小野田「……」

サリナ「冗談。綾とは一度もそんな事はなか

った。あいつが誰かと勘違いしてるのよ」

小野田「……え？ で？ それが？」

サリナ「ま、そういう関係じゃないって事」

小野田「じゃあ、どんな関係？」

サリナ「この共同パートナーよ。店の場所

を決めたり、内装を考えたり。ま、今んと

こ彼女の言う通りしてるから順調よ」

小野田が周りを見回す。

サリナ「綾ならいないわ。逃げたんじゃない」

小野田「え？」

サリナ「知らないけど」

小野田「はつきり言えや！」

心配した女性客1が近づいて来る。

サリナ「(女性客1に) 大丈夫」

小野田をにらみ、元の席に戻る女性客1。

サリナ「大声出さないでよ」

小野田「どこにおるか教えろ。一緒に住んでるやろ」

サリナ「今日の昼まではね」

小野田「今日の昼？ どういう意味や？」

サリナ「家を出てったの。もう戻って来ない」

小野田「綾がそう言うたんか？」

サリナ「言葉には出さないけど、そう感じた。でも、どこ行ったのかな。アテもないのに」

小野田、それを聞いた瞬間に立ち上がる。

そして走って店を出ていく。

○ 京都河原町(夜)

人の間を縫うように全力で走る小野田、赤信号を無視して道路を渡る。

轆かれそうになりながら、駐車していた自分の車のところに来る。

駐禁の張り紙を破り捨て、車に乗り、急発進で走り去る。

○ 大阪中央病院・個室(夜)

父・北島茂(♂)が口に酸素マスク、腕に点滴と医療機器に繋がれて眠っている。頬もこけ、やせ細っている。

幸子とみさ江が呆然と見つめている。

みさ江「……一日の半分以上は寝てるって」

幸子「(ショックで) ……」

そこにスマホを見ながら、姉の北島亜美(20)がやって来る。

化粧が濃く、露出度の高い服装だ。

亜美「久しぶりやん。あたしな、今東京でキヤバ嬢してるねん」

幸子「(全く見ず) ……」

亜美の携帯が鳴る。

亜美「(電話を取り) もっしー」

と病室を出ていく。

みさ江「……倒れた時、胸ポケットにこれだ

け入ってたみたいやわ」

と写真を出す。

そこには幸子、亜美、みさ江が笑顔で映っている。

みさ江「(泣きながら) 罰が当たるなら、私の方やのに。家族思いのパパがこんな事になるなんて……」

幸子「(写真を見つめ) ……」

そこに戻って来る亜美。

亜美「今日の昼にな、寝てたら知らん番号から着信あつてん。客やと思つて出たらオカシやん。で、こんな事なつててビックリやわ。てかお前、めっちゃ背え伸びたな」

と幸子の頭をポンポンと叩く。

幸子「(乱暴に払い) 汚い手で触るな!」
と出て行く。

○ 同・一階エントランス(夜)

深夜、静まり返っている。

一人で椅子に腰掛けている幸子。

そこにみさ江と亜美が来る。

みさ江「……四国にいい病院があるねんて。寝たきりの人と家族が住めるトコ。一緒に来てほしいねんけど」

幸子「……」

みさ江「パパは保険に入ってたし、会社からもおカネが出るから」

亜美「あたしも迷惑ばっかかけたから、今回は親コーコーやと思つて行くわ」

幸子「……」

みさ江「パパのためやと思つて、ね?」

幸子「……」

亜美「なあつて?」

幸子「(激昂して) ええ加減にせえー!」
声がエントランスに響く。

幸子「さつきから綺麗ごと言うてるけど、お前ら、家族を無視して好き勝手に来たやろ。今さらなんや!」

みさ江「……」

亜美「……」

幸子「消えるようにおらんって、今度は一緒に暮らさへんか。それもパパ利用して」
みさ江「……」

幸子「ウチは好きにさせてもらおう！」

亜美「ガキ一人で何ができるねん」

幸子「(亜美をにらみ)……」

みさ江「……幸子の気持ちはよう分かるけど」

幸子「分かってへん！ 分かってへんから、

クズみたいな事ができるねん！」

サツと立ち、病院を出て行く幸子。

みさ江・亜美「……」

○ 小野田のアパート・表 (早朝)

急ブレーキで車が止まり、降りる小野田。階段を駆け上がり、ドアを開ける。

○ 小野田の部屋・居間 (早朝)

飛び込んでくる小野田。

カーテンの隙間から白い光が漏れ、部屋は薄明るい。

誰もおらず、時計の秒針音だけ聞こえる。

小野田「……」

○ 同・寝室 (早朝)

小野田が入ってくる。

小野田「(見渡し)……」

部屋はキレイに掃除され、片付いている。

○ 同・居間 (早朝)

戻って来る小野田、玄関ドアの郵便受けに封筒が届いているのに気づく。

取りに行くと、差出人の名前も住所も、

何も書いてない。

小野田「……」

開けると、部屋のカギが出てきた。

中はそれ以外、何も入ってなかった。

皮肉な笑みを浮かべる小野田、封筒をク

シャクシヤと丸めて捨てる。

カーテンを開ける、朝陽がまぶしい。

窓外にはうっそうとした雑木林が見える。

小野田、じっと眺めている。

○ 雑木林

アルミの脚立は倒れ、ゴムのサンダルは揃えられ、ロープは木に結ばれ、脱いだズボンも置いてある。

あの日のままだ。

小野田が手にゴミ袋を持ち、やって来た。木の陰から綾が現れる。

目を凝らすと綾は消えた、幻覚だった。

呆然と立っていると携帯電話が鳴る。

小野田「(電話に出て) はい」

中井の声「店長が飛んじやって大変なんスよ。

先輩、早く店に戻って来れないスか？」

小野田「(電話に) 今日からイケるで」

中井の声「めっちゃ助かる。仕入れもシフトもできないから困ってたんスよ。近くにキヤバクラできたんで、おごりますね」

小野田、話しながら片づけを始める。

○ 小野田のアパート・裏

雑木林から脚立を担ぎ、ゴミ袋を持った

小野田が出てくる。

幸子の声「おっちゃん」

見上げると中学校の制服を着て、幸子が自分の部屋のベランダに立っていた。

小野田「あれ？」

幸子「入れるようになってん」

小野田「なんで、その服？」

幸子「今日、学校の登校日やねん。(ゴミ袋を指さし) それなに？」

小野田「糞まみれのズボン」

幸子「もう自殺はやらんやろ？」

小野田「ハゲの進行も止まったしな」

幸子「(笑いながら) 早く上がって来たら」

○ 小野田の部屋・居間

脚立を玄関に立て掛ける小野田。

幸子も入って来る。

幸子「担任に転校するって伝えなアカンねん」

小野田「その病院で、四国のどこにあるん？」
幸子「知らん」

小野田「なんやそれ」

幸子「だって、さっき聞いたばっかりやもん」

小野田「パパのためとはいえ、家族を許すんか。成長したなあ」

幸子「オカンらにまだ言っていないけどな。（部屋を見渡し）ここでおっちゃんと暮らすのもええけど、それは甘えすぎやろ？」

小野田「さっちゃん、中二の夏休みは勉強、部活、遊びを精一杯やらな。これ以上、おっちゃんと時間の無駄遣いしたらアカン」

幸子「（真剣に）ウチ、ホンマにこれで良かったんかな？」

小野田「ああ、人生には折れる事も必要や」

幸子「（自分に言い聞かせるように）うん、ウチは間違っていない」

幸子「小野田の方に向き直り、深々と頭を下げる。」

小野田「どうした？ 急にかしこまって」

幸子「短い間でしたが、お世話になりました」

小野田「いえいえ、何のお構いもできず」

幸子「……そうや、綾さんには会えたん？」

小野田「会えたような、会えてないような」

幸子「なに、それ」

小野田「でも、スツキリはしたわ」

幸子「そら良かった」

小野田「うん」

幸子「引越したら会えへんから、寂しいわ。おっちゃんはウチがおらんって、静かでええな」

小野田「……」

うつむいて肩を揺らす小野田。

幸子「ウソ泣きなんかして」

顔を上げる、本当に泣いていた。

幸子「え……」

小野田「仕事が上手く行かんし、家族もいなくて天涯孤独で……」

幸子「自殺の理由やろ？」

小野田「（首を左右に振り）あれウソやねん。」

ホンマは綾に逃げられたから」

幸子「やっぱり本気で好きやったんや」

小野田「(うなずき) さっちゃんの言う通り、

重大なきっかけを僕が言うた」

幸子「何言うたん？」

小野田「プロポーズした。綾は『考えさせて』

って、一か月後にいなくなった。それが答

えやったみたいや」

幸子「……」

小野田「綾と結婚して子供ができて、家族に

なる。そんな楽しい人生が待っていると思っ

てた。情けないけど、今日まで帰って来る

かとも思ってた。……でも、もう終わった。

また一人に戻るんやな」

と膝をついて号泣する。

幸子「(抱き締め) よしよし、頑張りや」

小野田「(泣きながら) どっちが年上が分か

らん。最後までカッコ悪いおっちゃんやで」

ウンウンとうなずく幸子。

幸子「……ウチもウソついてた」

小野田「何を？」

幸子「学校で、みんなとテキストに合わせて

上手くやってるって言うたけど。ホンマは

友達一人もおらん。それどころか、二年に

なっってからクラスで一言も喋ってない」

小野田「なんで？」

幸子「分からんけどみんなから無視されてた。

いじめ？ 嫌われてた？ そんな感じ」

小野田「さっちゃん、強いオンナやわ」

幸子「ウチだってチョー傷ついたわ。それよ

り早くシャワー浴び。仕事に遅刻するで」

○ 小野田のアパート・表

階段に腰掛けて、待っている幸子。

スーツ姿の小野田が部屋から出てくる。

幸子「時間かかり過ぎ」

小野田「これやるわ」

と小さな箱を渡す。

幸子が開けると風鈴だった。

幸子「ああ、こっちか」

小野田「『いっちょ。』」

幸子「婚約指輪の方かと思った」

小野田「見つけてたんか。どうせやから、アレも持っていく？」

幸子「それは重い」

小野田「(笑って) そやな」

二人が階段を下りる。

すると一階から、部屋の内覧に来ていた若いカップルが出てくる。

男性1「(小野田に) このアパートの住み心地って、どうですか？」

小野田「『なんか違うなあ』って感じですよ」

女性1「なんか違う？」

幸子「はい。『なんか違うなあ』ですよ」

カップルが顔を見合わせていると、不動産屋が部屋から出てきた。

不動産屋「へんな事言わないで下さい」

小野田と幸子、小走りで逃げる。

○ 住宅街

カンカン照りの下、並んで歩く小野田と幸子。

二人を見て、女子中学生たちが笑いなが通り過ぎる。

小野田「今の子らって？」

幸子「同じクラス。もう何言われても平気や。

てか、ホームセンターってスーツ通勤？」

小野田「今日は特別。ずっと休んで迷惑かけ

たから、謝りに回らなアカンねん」

幸子「(照れて) 似合ってるやん」

小野田「そうやろ。これで合コン行ったら、

めっちゃモテるねんで。……知らんけど」

幸子「真似せんとって」

分かれ道に着き、立ち止まる二人。

小野田「(右を指さし) 駅、あっちゃや」

幸子「(左を指さし) 学校、こっちゃや」

二人、黙る。

間に耐えられず喋りだす幸子。

幸子「ん、じゃあ」

小野田「待って」

幸子「寒い事、言わんとつてや」

小野田が手を出す。

握手と思いき幸子も手を出すと、何かを握らされる。

幸子がゆっくり手を開く、カギだった。

小野田「またホームレスになったら、帰って来い」

幸子「キツイ冗談やけど嬉しいわ」

小野田「(手をあげ) ほな、またな」

幸子「(手をあげ) ほな、また」

とクルリと背を向けて歩き出す。

後ろ姿に真夏の太陽を受け、まぶしい。

幸子は一度も振り返らず、去って行った。

小野田「……ホンマ、強いオンナやで」

小野田も駅の方へ歩き出す。

足取りは軽やかだ。

○ 中学校までの道

幸子が歩いている。

大粒の涙がポロポロこぼれ、鼻水もズルズル流れている。

中学校の校舎が見えてきた。

幸子「よっしゃ」

と気合を入れて、ハンカチで顔を拭く。

涙は、もう止まった。

生徒たちが登校している。

幸子も元気いっぱい校門をくぐっていく。

セミは今日もやかましく鳴いている。

○ ホームセンター『コヨネ』・店内

オープン前、年配のパートたちが掃除や品出しをしている。

みんな、誰とも喋らず黙々と働く。

そこに小野田が来て、声をかけながらお菓子を配り始める。

小野田「(パート1に) 迷惑おかけしまし

た。(パート2に) あら、髪型変えました

? 黒木瞳かと思いましたよ。(パート3

に) 山崎さんはいつもいい匂いしますね。

(パート4に) 相変わらずの美肌でスタイ

ルも抜群。去年辞めた谷さんはネイルしか褒めるトコ無かったのに。(パート5に)
中田さんの笑顔はサイコー。元気をもらえます」

パート全員、笑顔になっていく。

○ 同・喫煙所

店の裏にある屋外喫煙所。

中井が一人でタバコを吸っている。

そこに制服姿でやって来る小野田。

中井「ご機嫌取りは終了ツスか？」

小野田「(うなずき) ほれ」

とお菓子を渡す。

中井「あざーす。あのパート軍団を手なずけられるの先輩しかいませんよ」

小野田「我慢さえしたら誰でもできる」

中井「(スマホを見て) もうオープンの間だ。今日もカネのために働くか」

とタバコを灰皿に捨てる。

小野田「(ノビをして) あー、充電満タン。お客さんの笑顔のために頑張るぞ」

中井「今の言葉、ガチでウケる」

小野田「ウチの社訓やで」

中井「そんな事より、今日行くキャバクラをセクキャバに変更していいツスか？」

小野田「僕は、どこでもええよ」

中井「そんなクールぶっても、下はビンビンっしょ？」

と股間をつかもうとする。

小野田「アホか」

とかわし、逆に股間をまさぐる。

二人はふざけながら店に入っていく。

誰もいなくなる喫煙所。

空には入道雲がモクモク湧き、遠くに建ち並ぶマンションはかげろうのようにゆらゆら歪んで見え、朝から気温は急上昇。夏はまだまだ終わらない。

【了】